

# 好古家・紅野芳雄と加茂遺跡

瀬尾晶太

西宮市文化財課 学芸員

## はじめに

2023年度関西大学博物館春季企画展「摂津加茂遺跡発掘70年展」において、昭和27（1952）年に開始した関西大学と関西学院大学による加茂遺跡の発掘調査の前史として、加茂遺跡に関わりをもつ7人の好古家が紹介された（合田・今井2023）。そのうちのひとりが本稿で取りあげる紅野芳雄（このよしお：明治26（1983）年－昭和13（1938）年）である（写真1）。

紅野は、大正6（1917）年から昭和13（1938）年にかけて、阪神間を中心とした遺跡の踏査を行い、その記録や考古学に関する覚書を「考古小録」という3冊のノートに残した（写真2）。その記録の精度は高く、学術的に評価され、現在は西宮市重要有形文化財（考古資料）「『考古小録』及び関係品」に指定されている。「考古小録」には、29回におよぶ加茂遺跡の踏査記録がみられる。また、踏査記録以外の「加茂」の記載を含めると39件におよぶ。本稿では、「考古小録」にみられる加茂遺跡に関連する記録を整理し、加茂遺跡調査研究史における紅野芳雄の調査記録の意義について考えてみたい。

## 1. 紅野芳雄について

先行研究（合田1998aほか、森下2017）に倣い、紅野芳雄の来歴について確認したい。

紅野芳雄は、のちに西宮町長に就いた紅野太郎の長男として西宮に生まれた。明治44（1911）年に茨木中学校を卒業した後、浪速銀行西宮支店に勤務し、大正8（1919）年から昭和13（1938）まで家業であった酒造業（のちの日本盛株式会社）の経営にあたった。こうした仕事の傍ら、遺跡の踏査や遺物の収集活動を行い、大正6（1917）年から昭和13（1938）年までの調査記録や考古学に関する覚書などを記録した3冊のノート「考古小録」を残した。「考古小録」の最後の記録は昭和13（1938）年4月20日のもので、筆記は22日にされたものといわれ、この3日後の25日に病気のため亡くなった。享年46歳であった。

また、生前には、吉井良尚（西宮神社宮司・歴史家）や田澤金吾（美術研究者）らと親交があり、西宮史談会を設立し、郷土史の研究をおこなった。



写真1 紅野芳雄

## 2. 「考古小録」について

「考古小録」については、先行研究（合田1998a、森下2017）にまとめられているため、詳細はそれらに譲り、ここではその概要について整理する。

「考古小録」は、大正6（1917）年4月22日から昭和13（1938）年4月20日までの紅野芳雄による遺跡の踏査活動や遺物の収集記録、博物館や博覧会の見学記録、自身のコレクションの出品記録、考古学に関する覚書などを連綿と記録し続けた3冊のノートである。採集資料と記載の対比が可能



写真2 稿本『考古小録』

な点、西宮地方の土地開発が著しくなる直前の遺跡分布を記録した点、今日知られる西宮市域の重要な遺跡を発見している点が重要である。また、紅野は「考古雑録」と「考古図譜」という2冊のノートも残している。この2冊のノートは、図を中心にまとめられたもので「考古小録」のさらなる理解に不可欠な補足資料としての性格をもつ。

紅野の没後には、一時中断していた西宮史談会の活動再開に際して、田岡香逸らが中心となり、紅野のノートを書籍化した『紅野芳雄遺著 考古小録』を刊行した（以下、本稿では、（森下2017）にならい、区別する必要がある場合には、ノートのもを「稿本」、書籍化されたものを「刊本」とよびわけ、両者を指す場合には、単に「考古小録」とする）。

平成22（2010）年5月12日には、稿本「考古小録」第1冊から第3冊、稿本「考古図譜」、稿本「考古雑録」、刊本「考古小録」、日記3点、採集遺物357点が、西宮市重要有形文化財（考古資料）「「考古小録」及び関係品」として文化財指定された。

## 3. 「考古小録」にみる加茂遺跡に関する記録

### （1）加茂遺跡に関する記録

刊本「考古小録」において、紅野芳雄と加茂遺跡の関わりがみられる記録を表にまとめた。

加茂遺跡に関する記録は39件あり、そのうち29項目（回）は遺跡の踏査記録である。記録の年代は、記載のない年もあるが、大正4（1915）年から昭和6（1931）年にかけての16年間である。ここでは、それらの記事を年次ごとに整理し、その動向についてみていきたい。

#### 【大正4（1915）年】

加茂遺跡に関する最初の記録は、大正4（1915）年7月27日付のものである（表-1）。「川辺郡川西村加茂の石器時代遺跡に至り片刃磨製石斧未成品、石鏃其の他採集す。」とあり、弥生時代のものと考えられる石器を採集している。この年の加茂遺跡に関する記録はこの1件のみである。

#### 【大正5（1916）年】

大正5（1916）年の関連記録は1件である。1月23日付（表-2）で、「川辺郡加茂の石器時代遺跡に至り、片刃磨製石斧の刃部1其の他を採集す。」とあり、前年同様、弥生時代のものと考えられる石器を採集している。

## 【大正6（1917）年】

大正6（1917）年の関連記録は1件である。9月8日及び9日付（表-3）で、「宝塚新温泉にて川辺郡加茂宮川氏所蔵発見石器土器の展覧会開催。」とある。「宮川氏」とは、宮川雄逸のことで、宮川石器館の開館（昭和11（1922）年）以前にコレクションの展覧会が開催されたことがわかる。

## 【大正7（1918）年】

大正7（1918）年の関連記録は1件である。9月1日付（表-4）で、所有する石器の内訳を記録している。この時点で、367点の石器を所有しており、そのうち加茂遺跡のものは47点あるとしている。

## 【大正8（1919）年】

大正8（1919）年の関連記録は3件である。6月8日付（表-5）は、西宮神社社務所で開催された西宮史談会の第2回考古資料展覧会への所有資料の出品記録である。複数点出品しており、加茂遺跡の石鏃と石錐が含まれている。

6月21日付（表-6）は、田澤金吾からの資料購入記録である。24点の石器を購入しており、そのうち、加茂遺跡の石器として「小部分が欠損した石庖丁」1点の記載がみられる。

10月5日付（表-7）は、11月2日に開催される明石史談会の展覧会に加茂遺跡の石器（器種不明）1点を含んだ3点の石器を出品するとの記述である。

## 【大正10（1921）年】

大正10（1921）年の関連記録は1件である。3月15日付（表-8）で、田澤から資料を譲り受け際の記録である。譲り受けた資料のなかに、加茂遺跡の貝輪1点が含まれている。

## 【大正15（1926）年】

大正15（1926）年の関連記録は1件である。10月4日付（表-9）で、「予ねて御来朝の瑞典皇太子グスタフ、アドロフ殿下本日神戸市へ御成り、三越樓上の考古資料展覧会を台覧あり。奉送迎及び遺物台覧の光栄に浴す。」とある。

「瑞典皇太子グスタフ、アドロフ殿下」とは、当時のスウェーデン皇太子で、のちにスウェーデン国王となるグスタヴ6世アドルフ（Gustav VI Adolf, 1882-1973）のことである（注1）。グスタヴ6世は、考古学や植物学の専門家として活躍した人物として知られ、特に考古学の分野では、ギリシャ、イタリヤなどのヨーロッパだけでなく、中国、韓国での発掘調査に参加している（岩波書店辞典編集部2013）。グスタヴ6世は、大正15（1926）年9月初旬にアメリカを経由して日本を来訪し、約1ヶ月の滞在中に、関東・関西・九州などをめぐり、発掘調査や資料調査をおこなった（角田1980）。この滞在中の調査には、浜田青陵（耕作）ら日本の考古学者も同行し、濱田はそのようすを『考古遊記』に記している（浜田1929）。

本記録は、日本に調査に来ていたグスタヴ6世が、神戸の三越で開催された考古資料展覧会を台覧したことを記している。グスタヴ6世が台覧した資料について具体的な記述があり、加茂遺跡の遺物として「石庖丁1点、貝輪1点、石錐12点、石鏃31点」が挙げられている。

こうした具体的な書きぶりから、紅野がグスタヴ6世の展覧会視察に際して、関係者として同行していたと推察する。

## 【昭和2（1927）年】

昭和2（1927）年の関連記録は1件である。9月1日付（表-10）で、所蔵石器の点数等をまとめた内容である。459点のうち、63点が加茂遺跡の石器である。

#### 【昭和4（1929）年】

昭和4（1929）年の関連記録は14件と最多を数え、すべて加茂遺跡の現地踏査記録である。

1月20日付（表-11）には、「十何年振りにて川辺郡川西村上加茂の石器時代に至る。此の地は大正3年頃、石器時代の一大遺跡として人類学雑誌上に発表せられてより、採集に来る者甚だ多かりし故、石器を採集出来るなど予期せざりしに、加茂神社の周囲を大ざつばに一巡し、打製石斧1、磨製石器残片1、石錐2、石鏃5、石匙の用に供せられしかと思はるる石器1、同残片1、計11箇を収得せり。俚人は神社の東側に石器多しといへるも、弥生式土器片多くして、11箇の内9箇は神社の西側にて収得せり。」とある。

「十何年振り」とは、大正5（1916）年（表-2）を指していると思われる。「大正3年頃、（中略）人類学雑誌上に発表せられてより」とは、笠井新也による報告（笠井1915a）のことと考えられる。

この年の一連の踏査に関する記録は、①踏査した場所、②かかった時間、③採集した遺物（器種と点数）を基本の事項として記述されていることが特徴である。

そして、この年の最後の記録になる12月22日付（表-24）には、14回の踏査の結果、186箇の石器を採集し、その大部分が石鏃と石錐であることを記述している。

#### 【昭和5（1930）年】

昭和5（1930）年の関連記録は9件あり、そのうち、調査記録が6件、所蔵資料に関する記録が1件、その他記録が1件である。

調査記録（表-25～28、30、32、33）については、前年の記録に比べ簡略化していることが特徴的である。踏査場所や踏査にかかった時間が省略されていることがある。ただし、11月26日付の記録（表-33）には、「今や加茂神社西北部にて遺物の最も豊なる部分は、南花屋敷住宅地となり、桃、蜜柑の木は無残に伐採せられ、縦横に数条の道路は敷設せられんとしつつあり。此の遺跡地大部分の煙滅も近かるべし。」とあり、加茂遺跡における宅地開発が進んでいくようすが記されている。

所蔵資料に関する記録として4月1日付の記録（表-29）があり、加茂遺跡の石器を287点所蔵しているとしている。

その他記録としたのは、日付不明の記録（表-31）である。前後の記録から、5月12日から9月22日までの間に記されたメモと考えられる。「稿本」には、「川辺郡川西村加茂二於テ大正34年頃発見セラレタル勾玉 今所在不明」という文章とともに、3面展開された勾玉の実測図風スケッチが描かれている（図版4）。「刊本」では、この勾玉について補足がなされている。これによると、この勾玉は田澤金吾が採集し、大阪辰馬某氏に譲渡されたものだという。「刊本」の編集にあたり、辰馬悦蔵に校閲を依頼したところ、写真があるのみで実物は行方不詳であることが判明した。これを受けて、「刊本」では勾玉をめぐる経緯とともに写真を掲載している。

#### 【昭和6（1931）年】

昭和6（1931）年は加茂遺跡に関する記録のみられる最後の年である。関連記録は5件で、いずれも踏査記録である。

1月23日付（表-34）では、「加茂神社西北部にて遺物の最も豊富なる区域に、昨秋出来たる南花屋敷住宅地に於いては、縦横の道路も既に完成し、売約済の土地の内には柵及び鉄条網を巡らせたもの散見す。」とある。現在の南花屋敷二丁目から三丁目にかけての範囲と推測でき、加茂遺跡における土地開発のようすがうかがえる。なお、現在、加茂遺跡の最盛期となる弥生時代中期における南花屋敷二丁目周辺は集落中心域、南花屋敷三丁目周辺は居住区や墓域であることが明らかと

なっている（川西市教委2016）。

## （2）「考古小録」にみる加茂遺跡関連記録の傾向と紅野芳雄の関心度の変化

「考古小録」には、加茂遺跡に関する記録のない年もあるが、大正4（1915）年から昭和6（1931）年の16年間にわたり記述がみられる。記録はその内容から1～3期にわけることができ、その区分は紅野の加茂遺跡に対する関心度の変化ととらえることができる。

1期は大正4（1915）年から大正5（1916）年にかけての期間で、関連記録は2件である。加茂遺跡が認識されて間もない時期における現地での採集記録だが、簡潔な内容で、強い関心はまだみることができない。

2期は大正6（1917）年から昭和2（1927）年にかけての期間で、関連記録は7件である。この期間は現地の調査記録はなく、加茂遺跡の出土品が展示されている展覧会の見学記録や、自身の所有する考古遺物（加茂遺跡以外も含む）の数量確認、所有する考古遺物の展覧会への出品記録で構成されている。この期間の記述では、加茂遺跡は複数の遺跡・遺物のなかに含まれているに過ぎず、紅野の加茂遺跡に対する関心度は高いとはいえない。

3期は昭和4（1929）年から昭和6（1931）年にかけての期間で、関連記事は29件である。紅野が加茂遺跡に強い関心を寄せ、熱心な現地調査をおこなった期間である。この期間の記述の特徴として、具体的な採集場所や調査にかけた時間、そのときの情景の描写など、詳細な文章で記されていることがあげられる。さらにこの期間を細かくみると、昭和4（1929）年は14件、昭和5（1930）年は9件、昭和6（1931）年は5件と件数は減少していく。このことから、紅野の加茂遺跡に対する関心のピークは昭和4（1929）年だとみることができ。そして、昭和5・6年と加茂遺跡に関連する記事数が減少する背景には、地元西宮の遺跡に対する関心が強くなっていることが「考古小録」から読み取れる。

## 4. 加茂遺跡研究史における紅野芳雄の調査記録の意義

紅野の16年間にわたる加茂遺跡に関する記録は、加茂遺跡の研究史において、（1）最初期の調査記録、（2）加茂遺跡の遺物に関する詳細な記録（補完資料）としての意義をもっている。

### （1）最初期の調査記録

加茂遺跡の発見から現在までに至る経緯について、川西市教育委員会は、①遺跡の発見〈大正4年（1915）～〉、②発掘調査のはじまり〈昭和27（1952）～〉、③緊急発掘調査の増加〈昭和40年代～〉、④重要遺構の検出と国指定〈平成4（1992）年～〉の4段階に整理している（川西市教委2016）。

加茂遺跡の発見は、笠井新也による一連の報告による（笠井1915a、1915b、1916a、1916b）。これらによると、笠井は、大正4（1915）年2月に、加茂神社の西側で磨製石斧、サヌカイト片、弥生土器を発見したことで加茂の地に遺跡があることを認識した。そして、同年3月に約5日間にかけて踏査による遺跡の分布調査を行い、弥生時代の石器製作遺跡であることを明らかにしている。

紅野の調査記録は、大正4（1914）年から昭和6（1931）年の期間で、「①遺跡の発見」期にあたる。紅野の加茂遺跡における最初の踏査記録は大正4（1915）年7月27日で、笠井が発見してから約5ヶ月後の記録である。加茂遺跡が認識された直後の、本格的な発掘調査が開始す

る以前のようなことを知ることで記録として重要である。なお、笠井の最初の報告（笠井1915a）では、田澤金吾率いる西宮史談会との間に起きた加茂遺跡の発見をめぐる騒動について触れられている（注2）。

紅野の記録からは、加茂遺跡周辺が開発されていくようすをうかがい知ることができる。例えば、昭和4（1929）年の「丘陵上無数の桃花今真盛りなり。」（表-16）や、「桃の葉未だ落ちず蜜柑の実稍大きくなれり。」（表-18）では、加茂遺跡周辺が宅地ではなく果樹園だったころのようすが書かれている。しかし、昭和5（1930）年になると、「今や加茂神社西北部にて遺物の最も豊なる部分は、南花屋敷住宅地となり、桃、蜜柑の木は無残に伐採せられ、縦横に数条の道路は敷設せられんとしつつあり。此の遺跡地大部分の煙滅も近かるべし。」（表-33）や、「加茂神社北西部にて遺物の最も豊富なる区域に、昨秋出来たる南花屋敷住宅地に於いては、縦横の道路も既に完成し、売約済の土地の内には柵及び鉄条網を巡らせたもの散見す。」（表-34）といった遺跡が土地開発されていくようすが書かれており、遺跡の環境が変化していく過程を知ることで記録として重要な記録である。

## （2）加茂遺跡の遺物に関する詳細な記録（補完資料）

紅野の調査記録には、遺物を採取した場所、遺物の種類（器種）、点数、ときには遺物に対する考察が記されている。また、適宜差し込まれている遺物のスケッチ（図版1～4）は実寸大で描かれていることが多く、その精度は現代考古学における実測図と遜色なく、図と実物の照合が可能なレベルである。これらは、紅野の確かな知識と観察眼によってなされたもので、現在も通用するデータとして、これまでの発掘調査成果を補完する情報として重要である。

加茂遺跡に関する記録の中で、遺物の種類（器種）と点数が明記されたものを集計すると349点である。このうち、縄文時代の石器である石匙3点を除外し、弥生時代に該当する遺物を抽出すると346点になる。弥生時代遺物の内訳は、石器類が320点（92.5%）、土器類が26点（7.5%）となる。最も多い遺物は、石鏃195点（56.3%）、次いで石錐76点（22%）であり、この2器種で全体の78%を占める。そのほか、石庖丁15点（4.3%）、磨製石斧類4点（1.2%）、打製石斧類2点（0.6%）、石槍（打製石剣か）3点（0.9%）、碧玉2点（0.6%）、その他石器23点（7.5%）である。こうした遺物のデータはこれまでの発掘調査成果を補完する資料として活用できるのではないだろうか。

## おわりに

本稿では、紅野芳雄の残した「考古小録」から加茂遺跡に関する情報を抽出し、紅野による調査が加茂遺跡研究史上どのような意義をもっているかについて検討をおこなった。加茂遺跡における紅野の調査活動は、加茂遺跡が考古学会で認識された直後からはじまっており、加茂遺跡の研究史上、初期段階に位置づけられる。また、その詳細な文章や精緻なスケッチから、採集遺物の器種や点数といった情報を得ることができ、現在に至る発掘調査成果を補完することができる。加えて、調査時の情景描写から、加茂遺跡の土地が開発されていく過程まで知ることができ、本格的な発掘調査が行われる以前のようなことをすることができる記録として重要である。

また、上記内容を検討する際の副次的な成果として、紅野の加茂遺跡に対する関心度の変化について考察をおこなった。筆者の主観によるところが多いと反省もあるが、「好古家・紅野芳雄」という人物を考えるうえでのひとつの試みとなったのではないだろうか。

本稿でおこなった作業は、「考古小録」にみられる他の遺跡についても有効と考えられる。今後

はさらなる分析を進め、それぞれの遺跡に対する理解を深めるとともに、「好古家・紅野芳雄」の人物像に迫っていききたい。

## 謝辞

本稿を執筆するにあたり、下記の方々、機関にご協力・ご助言をいただきました。末筆にはなりますが、記してお礼申し上げます。

合田茂伸、森下真企、西宮市立郷土資料館

## 注釈

注1. グスタフ6世と日本の考古学の関係性については、(鈴木2015)、(仲嶺2017)の研究がある。

注2. 笠井新也と田澤金吾の間で起きた加茂遺跡をめぐる騒動について、笠井の加茂遺跡に関する最初の報告(笠井1915a)に次のとおり記載されている。「然るに一方西宮史談会の熱心家田澤金吾氏は、地形から見當をつけたりしく、同年四月に至つて、伊丹臺地延長二里の間を隈なく搜索して、遂にこの遺蹟を発見された。而してその後或いは單獨に、或は同志と共に數回この遺蹟を踏査して、勾玉・石斧・石庖丁等の逸品を採集されたのである。然るに予はこの遺蹟を知つてゐるものは、勿論自分一人であるとのみ思つてゐたので、同じく六月、西宮史談会の例会に初めて出席して、この遺蹟のことを得々として話した。所が豈計らむや、既に右の如き次第であつたので大いに驚いた。而も西宮史談会の連中では、池田の笠井には地の利を占められてゐるから、成るべくこの遺蹟のことは秘密にしておかうとふ内約までしてあつたださうである。我輩の繩張を荒らしながら、秘密にしておかうなどは實に怪しからぬ話である。(中略)かくて我輩獨占の夢は破られた我輩が苦心して発見した大事の遺蹟は、侵入軍のために完膚なきまでに蹂躪されたのである。併しながら、これがためにこの遺蹟の研究の進捗したことは勿論である。彼我採集物の對照觀察は、單獨研究では得られない利益を相互に與へたのはいふまでもない。」

この文章から、笠井が加茂遺跡を発見してから、約2ヶ月後には田澤も加茂遺跡を発見していたことがわかる。また、その年の6月には、笠井が西宮史談会の例会で加茂遺跡について話をしている。そして紅野が初めて加茂遺跡を訪れたのはその1ヶ月後になる。こうした郷土史家のネットワークの中で得られた情報をもとに、紅野は加茂遺跡に関わっていったようだ。また、この文章には、西宮史談会、池田史談会、神戸史談会といった郷土史家のグループの名が見え、阪神間における郷土史家たちの活発な活動が行われていたことがうかがえる。笠井の「悔しさ」から起きた騒動ではあるが、文章の最後には、自分以外の手が入ることによって加茂遺跡の研究が進んだと述べており、その研究に対する姿勢には見習うべきものがある。

## 写真・図版出典

写真1・2：西宮市立郷土資料館所蔵・提供

図版1～4：にしのみやデジタルアーカイブ(<https://archives.nishi.or.jp>) 搭載の「考古小録 第二冊」(資料番号：282040200000208)を元に作成した。なお、各スケッチはオリジナルのデジタルデータから70%縮小して掲載している。

## 参考文献

岩波書店辞典編集部編2013『岩波世界人名大辞典』、岩波書店

岡野慶隆2006『加茂遺跡—大型建物をもつ畿内の弥生大集落—』日本の遺跡8、同成社

笠井新也1915a「玉類・齋瓮及び彌生式土器を混出する石器時代の遺跡(一)」『人類学雑誌』第30巻第11号、東京人類学会

笠井新也1915b「玉類・齋瓮及び彌生式土器を混出する石器時代の遺跡(二)」『人類学雑誌』第30巻第12号、東京

人類学会

笠井新也1916a「玉類・齋瓮及び彌生式土器を混出する石器時代の遺跡（三）」『人類学雑誌』第31巻第1号、東京人類学会

笠井新也1916b「玉類・齋瓮及び彌生式土器を混出する石器時代の遺跡（四）」『人類学雑誌』第31巻第1号、東京人類学会

川西市教育委員会2016『史跡加茂遺跡保存活用計画』

合田茂伸1998a『紅野芳雄「考古小録」—西宮考古学のパイオニア—』西宮市立郷土資料館第13回特別展示図録、西宮市立郷土資料館

合田茂伸1998b「特別展「紅野芳雄『考古小録』—西宮考古学のパイオニア—」『西宮市立郷土資料館ニュース』第23号、西宮市立郷土資料館

合田茂伸2018「本山考古室と紅野芳雄「考古小録」」『阡陵』No.78、関西大学博物館

合田茂伸2020「紅野芳雄著『考古小録』にみる考古資料収集家」『なにわ大阪と本山彦一—大正期大阪への貢献と本山考古室—研究成果報告書』、関西大学なにわ大阪研究センター

合田茂伸・今井真由美2023『摂津加茂遺跡発掘70年展』春季企画展図録、関西大学博物館

紅野芳雄1940『考古小録』、西宮史談會

小林行雄1940「『考古小録』と紅野芳雄氏」『考古学』第11巻第7号、東京考古学会

鈴木希帆2015「スウェーデン皇太子に贈られた縄文土器—紀州徳川コレクションの調査を兼ねて—」『武蔵野美術大学研究紀要』No.45、武蔵野美術大学

角田文衛1980「スウェーデン国王グスターヴ6世の逝去」『ヨーロッパ古代史考』、株式会社平凡社

仲嶺真信2017「瑞典皇室と臼杵石仏」『別府大学紀要』58、別府大学

浜田青陵1929『考古遊記』、刀江書院

森下真企2017『西宮市重要有形文化財（考古資料）「考古小録」及び関係品調査報告書』西宮市文化財資料第64号、西宮市教育委員会



表 「考古小録」にみえる加茂遺跡に関する記録一覧

番号	年月日	内容
1	大正4 (1915) 年 7月27日	川辺郡川西村加茂の石器時代遺跡に至り片刃磨製石斧未製品、石鏃其の他採集す。
2	大正5 (1916) 年 1月23日	川辺郡加茂の石器時代遺跡に至り片刃磨製石斧の刃部1其の他を採集す。
3	大正6 (1917) 年 9月8、9日	宝塚新温泉にて川辺郡加茂宮川氏所蔵加茂発見石器土器の展覧会開催。
4	大正7 (1918) 年 9月1日	現在所有石器 367点 内 (中略) 同 川辺郡川西村加茂 47
5	大正8 (1919) 年 6月8日	西宮神社社務所に西宮史談会第2回考古資料展覧会を開催す。吾が出陳物左の如し。 一、石鏃 加茂、六軒、越水 一、石錐 加茂 (後略)
6	大正8 (1919) 年 6月21日	石器購入 石庖丁 加茂 小部分欠損 1 磨石斧 完全 1 同 岩手県 頭部半分 1 石匙 完全 1 石鏃 国府 同 14 同 喜志 同 4 石槍 国府 残片 1 不明石器 喜志 同 1 以上10円に田澤氏より購入す。
7	大正8 (1919) 年 10月5日	来る11月2日開催明石史談会の展覧会に加茂石器1葉、越水山石器1葉、岡田山石器1葉各綴付出品す。
8	大正10 (1921) 年 3月15日	左記遺物田澤氏より譲り受く。(但し本箱と交換) (中略) 貝輪 1 加茂 半磨石槍 1 同 (後略)
9	大正15 (1926) 年 10月4日	予ねて御来朝の瑞典皇太子グスタフ、アドロフ殿下本日神戸市へ御成り、三越樓上の考古資料展覧会を台覧あり。奉迎送及び遺物台覧の光榮に浴す。 台覧遺物 石庖丁 1点 加茂 貝輪 1点 同 石錐 12点 同 石鏃 31点 同 (後略)
10	昭和2 (1927) 年 9月1日	現在所蔵石器左の如し。 (中略) 加茂 63 (中略) 合計 459
11	昭和4 (1929) 年 1月20日	十何年振りにて川辺郡川西村上加茂の石器時代遺跡に至る。此の地は大正3年頃、石器時代の一大遺跡として人類學雜誌上に発表せられてより、採集に来る者甚多かりし故、石器を採集出来るなど予期せざりしに、加茂神社の周圍を大ざつばに一巡し、打製石斧1、磨製石器残片1、石錐2、石鏃5、石匙の用に供せられしかと思はるる石器1、同残片1、計11箇を収得せり。俚人は神社の東側に石器多しといへるも、弥生式土器片多くして、11箇の内9箇は神社の西側にて収得せり。
12	昭和4 (1929) 年 1月30日	川辺郡川西村上加茂の石器時代遺跡へ行く。加茂神社西方及び西北方の地域にて、午後1時30分より4時まで約2時間半の精査にて、石庖丁残片1、石槍残片1、三角形にて刃の部のみ磨きたる石器(恐らくは石斧)1、石錐1、石鏃6、同残片4、外に残片石器3を採集せり。

番号	年月日	内容
13	昭和4(1929)年 2月21日	曇天無風、川辺郡川西村上加茂の石器時代遺跡に至る。本年に入りて3回目なり。約2時間半の精査にて、石庖丁残片1、石鏃6、粗製にて一部分欠損せる石鏃1、石鏃残片(紐ノ部)1、打製小石斧下半部1、磨製石器残片1、一部分欠損せる石器1、計12箇を採集す。全部加茂神社の西より北に互る果樹畑中よりなり。 加茂神社東果樹畑中に無数に散在する弥生式土器破片中より、変わりたる紋様あるもの2箇採集す。
14	昭和4(1929)年 3月6日	川辺郡川西村上加茂の石器時代遺跡に至る。約3時間に互る精査にて、石鏃11、同欠損せるもの1、石錐欠損せるもの6、一部分磨製の小石片1、方形の打製小石器1、外に石器残片3、計23箇を取得す。全部加茂神社の西方より北方に互る地域よりなり。
15	昭和4(1929)年 3月21日	川辺郡川西村上加茂の石器時代遺跡へ行く。約2時間半の精査にて、磨製石斧残片1、石庖丁残片1、石鏃11、石錐2、外に打製石器残片1、計16箇を採集す。全部加茂神社の西方より北方に至る地域よりなり。
16	昭和4(1929)年 4月9日	川辺郡川西村上加茂の石器時代遺跡へ行く。丘陵上無数の桃花今真盛りなり。約2時間の精査にて石鏃5箇、石錐5箇及び石器小残片(有孔なるにより恐らく石庖丁)2箇、合計12箇を採集す。
17	昭和4(1929)年 6月22日	川辺郡川西村加茂の石器時代に至り、約1時間半の精査にて、完全なる石錐1、一部分欠損せる石鏃1、有孔なるにより石庖丁と思はるる磨製石器残片1、外に大体大形の自然石の一面に縦横数条の刻線あるもの1を採集す、最後のものは用途不明なり。
18	昭和4(1929)年 9月13日	川辺郡川西村加茂の石器時代遺跡に至る。桃の葉未だ落ちず蜜柑の実稍大きくなれり。約2時間半の精査にて、石鏃完全なるもの6、欠損せるもの8、石錐完全なるもの6、有孔なるにより石庖丁と思はるるもの残片1、外に三角形打石器1、計22箇を採集す。
19	昭和4(1929)年 9月22日	昨日一昨日は終日雨なり。 川辺郡川西村加茂に至る。約2時間の精査にて、石鏃完全なるもの2、一部分欠損せるもの4、半分以上欠損せるもの2、磨製石器(石庖丁か)残片1、計9箇を採集す。雨後の割に少く、図示する程のものなし。
20	昭和4(1929)年 11月17日	川辺郡川西村加茂に至る。約2時間半の精査にて完全なる石錐1、欠損せる石鏃3、碧玉片1、有紋弥生式土器片3を採集せり。
21	昭和4(1929)年 11月20日	川辺郡川西村加茂に至る。約3時間の精査にて、石匙未製品1、磨製石器残片1、石錐完全5、欠損1、石鏃完全8、欠損2、計18箇及び有紋弥生式土器残片2を取得す。
22	昭和4(1929)年 11月27日	川辺郡川西村加茂に至る。約2時間半の精査にて石鏃完全なるもの5、欠損せるもの6、石錐完全なるもの2、欠損せるもの1、外に一部分欠損せる打製石器1、計15箇を取得す。完全なる石鏃の内に三葉形式のもの1箇あり。此の形式のものは本遺跡にては珍しく稀にしか発見せられず。
23	昭和4(1929)年 12月13日	川辺郡川西村加茂に至る。約2時間半の精査にて石庖丁残片1、石錐6、石鏃8、計15箇及び弥生式土器口辺部残片にて、直径2分5厘の貫通せざる円孔1箇所あるもの1箇を採集す。
24	昭和4(1929)年 12月22日	川辺郡川西村加茂に至る。約2時間の精査にて、石鏃5箇、石錐2箇、磨製石器残片2箇(1箇は石庖丁、1箇は石斧と思はる)及び弥生式土器小片にて径約1分の貫通せる円孔あるもの1箇を採集す。本年中此の遺跡へ行くこと前後14回にて、石器類186箇を採集せり。然し大部分は石鏃、石錐にて、其の他のものは甚だ僅少なり。
25	昭和5(1930)年 1月18日	川辺郡川西村加茂に至り、約2時間半の精査にて、石鏃3箇、石錐3箇、有孔石器残片(石庖丁?)1箇、石鏃の欠損せるものと思はるるもの1箇及び有紋弥生式土器小片2箇を採集せり。 今や此の遺跡も余程の注意を以つて捜査せなければ、石器類の採集甚困難となり来れり。
26	昭和5(1930)年 3月4日	川辺郡川西村加茂に至り、石庖丁残片1、石鏃欠損せるもの共12、石錐完全なるもの1及び欠損石器2箇を採集せり。
27	昭和5(1930)年 3月22日	川辺郡川西村加茂に至り、石鏃5、石錐6、有紋弥生式土器残片1を採集す。
28	昭和5(1930)年 3月29日	川辺郡川西村加茂に至り、石鏃僅に1箇。

番号	年月日	内容
29	昭和5（1930）年 4月1日	現在所蔵石器内訳 （中略） 加茂 287 （後略）
30	昭和5（1930）年 5月12日	良元村小林ゴルフリンクス内甘香園古墳の畔にて、石鏃2箇取得す。1箇は柳葉式の半加工品、1箇は三葉形式の一部分欠損せるものなり。 次に川辺郡川西村加茂に至る。約1時間の捜査にて、石鏃9、石錐2、計11を採集す。
31	日付不明 （昭和5（1930）年 5月12日と9月 22日の間）	【稿本】川辺郡川西村加茂二於テ大正34年頃発見セラレタル勾玉 今所在不明 【刊本】此の勾玉は大正初年田澤金吾氏拾得にかり同君より大阪辰馬某氏に譲渡されし由にて其の後の事情未だ調査の機を得ず、偶々紅野芳雄氏筆写の図あり、後の参考のため本書64頁に挿入す。然るに今回刊行に当り辰馬悦蔵氏の校閲を願ひし所、同氏の所蔵に上記の写真あり、実物の行方不詳の今日、真に珍重すべき史料と思惟し、乞ふて巻末に付す。
32	昭和5（1930）年 10月28日	川辺郡川西村加茂に至り完全なる石鏃3箇採集、雨のため已むなく帰宅、捜査時間約40分。
33	昭和5（1930）年 11月26日	川辺郡川西村加茂の石器時代遺跡に至る。今や加茂神社西北部にて遺物の最も豊なる部分は、南花屋敷住宅地となり、桃、蜜柑の木は無残に伐採せられ、縦横に数条の道路は敷設せられんとしつつあり。此の遺跡地大部分の煙滅も近かるべし。約2時間の捜査にて石鏃10箇、石錐4箇、磨石器残片2を採集す。
34	昭和6（1931）年 1月23日	川辺郡川西村加茂の石器時代遺跡に至る。加茂神社西北部にて遺物の最も豊富なる区域に、昨秋出来たる南花屋敷住宅地に於いては、縦横の道路も既に完成し、売約済の土地の内には柵及び鉄条網を巡らせたもの散見す。約2時間の捜査にて石鏃8箇、石錐6箇及び石庖丁残片1箇を採集す。
35	昭和6（1931）年 2月2日	川辺郡川西村加茂に至る。加茂神社東方部にて石庖丁残片2、石槍残片と思はるるもの1、一部分に磨痕ある石器残片1、石鏃10、石錐3、及び紋様ある弥生式土器片2、又同神社西北部にて石鏃4、石錐1、碧玉片1を採集す。
36	昭和6（1931）年 2月8日	川辺郡川西村加茂に至る。加茂神社東方部に於いて、石鏃6箇及び石鏃としては余りに大きく寧ろ石槍と思はるるもの1箇を採集。又同神社西北部に於いても、石鏃2箇及び石錐2箇を採集す。
37	昭和6（1931）年 3月20日	川辺郡川西町加茂に至る。春光蕩々たれども桃花未だ開かず。約2時間の精査にて石鏃4箇、石錐3箇、磨製石器残片1箇及び弥生式土器口辺部にて条線のあるもの残片1箇を採集す。
38	昭和6（1931）年 3月27日	川辺郡川西町加茂に至り、石鏃8箇、石錐2箇、石庖丁小残片2箇、及び不明石器残片2箇を採集す。石鏃1箇、石錐1箇の他は皆残片なり。
39	昭和6（1931）年 5月2日	川辺郡川西町加茂に至り約2時間半の精査にて石鏃7箇、石錐2箇、磨製石器残片2箇を採集す。雨蛙甚多し、20数匹を捕りて帰る。

備考1：原則、刊本「考古小録」からの引用である。稿本「考古小録」からの引用である場合は、文頭に【 】で表記している。

備考2：原文で旧字体が用いられている漢字は、新字体に置き換えて表記している。

備考3：原文の数字は漢数字であるが、アラビア数字に置き換えて表記している。

備考4：送り仮名、単位は原文ママで表記している。



昭和4年1月20日



昭和4年1月30日



昭和4年2月21日



昭和4年3月6日

図版1 稿本「考古小録」にみる加茂遺跡の遺物スケッチ(1)(縮尺不同)



昭和4年3月21日



昭和4年4月9日



昭和4年6月22日



昭和4年9月13日

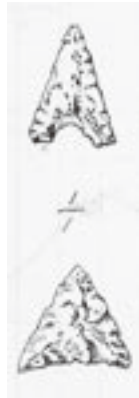


昭和4年11月17日

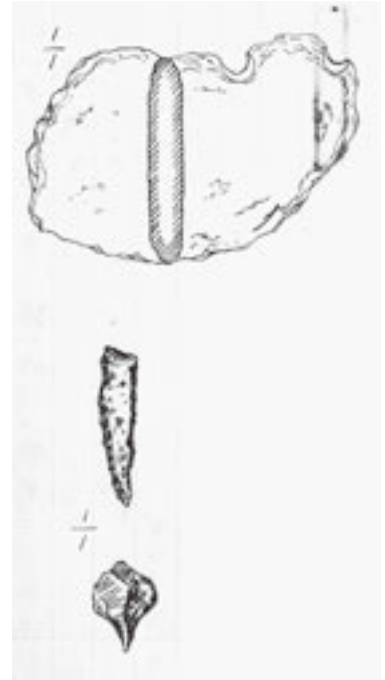
図版2 稿本「考古小録」にみる加茂遺跡の遺物スケッチ(2)(縮尺不同)



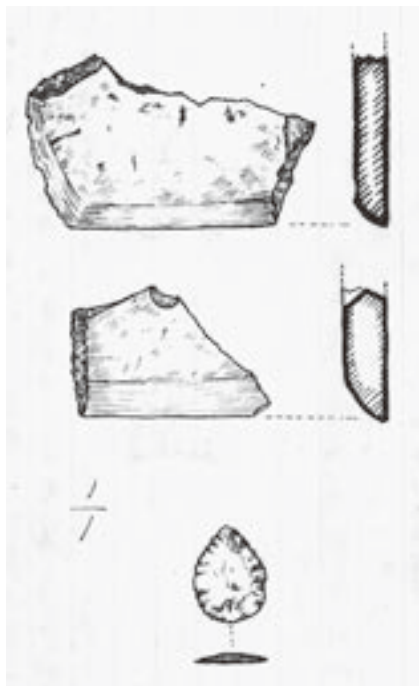
昭和4年11月20日



昭和4年11月27日



昭和4年12月13日



昭和4年12月22日



昭和5年3月4日



昭和5年10月28日

図版3 稿本「考古小録」にみる加茂遺跡の遺物スケッチ(3)(縮尺不同)



昭和5年11月26日



昭和6年2月2日



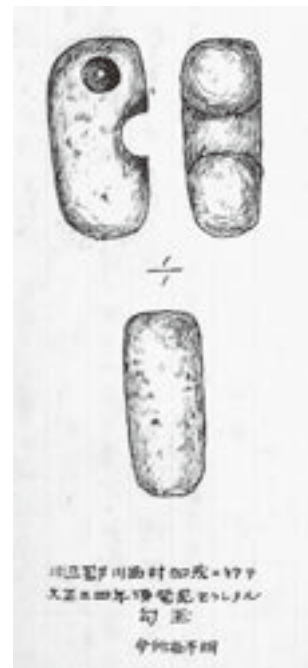
昭和6年2月8日



昭和6年3月20日



昭和6年3月27日



日付不明

図版4 稿本「考古小録」にみる加茂遺跡の遺物スケッチ(4)(縮尺不同)

